

〔論 文〕

ソシュール学説の一つの誤りについての考察⁽¹⁾ —「言語実存体」について—

松中 完二^{*1}

An Analysis of an Error in Saussure's Linguistics
—On “*les entités concrètes*”—

Kanji MATSUNAKA^{*1}

Abstract

The Swiss linguist, Ferdinand de Saussure is considered as the founding father of modern linguistics. His theories have been widely applied in the field of linguistics. The *Cours de linguistique générale* (*Course of General Linguistics*) is his most lasting contribution. Sometimes referred to as the Bible of linguistics, it has had a lasting impact on the linguistic research of the 20th century and remains valuable till date.

Saussure's concept of “*les entités concrètes* (concrete entities)” is developed in *Cours de linguistique générale*, which discusses the nature of language. Motoki Tokieda raised a strong objection to this notion. The discovery of Saussure's rough drafts in 1996, however, has opened interpretive space for an argument that Saussure's and Tokieda's positions may be more similar than even Tokieda could have realized.

In this study, I draw upon examples in Saussure's drafts and argue for a new interpretation of Saussure's notion of “*les entités concrètes*”. This interpretation clarifies how Tokieda's linguistic theories may bear a close resemblance to Saussure's work.

Keywords : Saussure, Cours de linguistique générale (CLG), les entités concrètes, Saussure's rough drafts, Motoki Tokieda

0. はじめに

Saussure (1857—1913) は「現代言語学の父」と称され、現代言語学は、その形成と発展の多くを1916年に刊行された Saussure の代表的書である *Cours de linguistique générale*。 (以下、CLG で表す) とそこで展開された学説に負っている。しかしながら、Saussure の学説にはその主張内容において矛盾点や謎が数多く存在する。

松中 (2014, 2015, 2016, 2017)⁽²⁾において、Saussure の死後3年後の1916年に彼の教え子である Bally と Sechehaye によって編集され、出版された *Cours de linguistique générale* (CLG) と、1996年に発見された Saussure の自筆草稿との記述の違いを洗い出し、Saussure 学説における様々な矛盾について問題の根本的原因を究明してきた。今回は、Saussure 学説の最大の誤りであった言語を「実存体」とする主張とそれに強く異を唱えた時枝誠記の反論について考察し、時枝の主張が今日的に見れば Saussure の自筆草稿と底通する理由について、解明を試みる。

1. 「実存体」としての言語

CLG では、言語を相互に織り込まれた要素から入念に作り上げられた構造 (structure) として捉え、記号によって成り立つ言語を「実存体」と考える。このことは、CLG では次のように説明されている。

“Les signes dont la langue est composée ne sont pas des abstractions, mais des objets réels (中略) ce sont

^{*1} 共通教育科
平成29年8月1日受理

eux et leurs rapports que la linguistique étudie; on peut les appeler les *entités concrètes* de cette science. (後略)

1. L'entité linguistique n'existe que par l'association du signifiant et du signifié (後略);” [斜体部原文ママ]
(CLG, 1916 : 144)⁽³⁾

“言語を構成する所の記号は抽象ではなく実存的対象である。(中略)言語学が研究するのは其れであり、其れ等の関係である。其れを此の科学の具体的実体 *entité concrète* と呼ぶことが出来る。(中略)

一. 言語実体は、能記所記の連合関係に依ってのみ存在する。(後略).” (小林英夫訳, 1928 : 209)⁽⁴⁾

“言語を組成する記号は、抽象物ではなくて、実在的客体である。(中略)言語学が研究するのはそれらの関係である。これをこの科学の具体的実存体 (*entité concrète*) と呼ぶことができる。(中略)

1. 言語実存体は、能記と所記との連合によらずしては存在しない。(後略)” [下線部原文ママ]
(小林英夫訳, 1940 : 137)⁽⁵⁾

“L'entité linguistique n'est complètement déterminée que lorsqu'elle est *délimitée*, séparée de tout ce qui l'entoure sur la chaîne phonique. Ce sont ces entités délimitées ou *unités* qui s'opposent dans le mécanisme de la langue.”
(CLG, 1916 : 145)⁽⁶⁾

“言語実体は、音連鎖上に於て其れを圍繞する凡ての物から分離し限定しない内は、完全に決定する事が出来ない。言語機構の中に於て対立を為すものは決定されたる実体、即ち単位 *unité* である。”

(小林英夫訳, 1928 : 210)⁽⁷⁾

“言語実存体は、限定された時、音連鎖の上においてそれを取巻く一切のものから分離された時、始めて完全に決定される言語の機構において対立をなすものは、このような限定された実存体、即ち単位である。” [下線部原文ママ]
(小林英夫訳, 1940 : 138)⁽⁸⁾

CLG では、*langue* を具体的な存在であると説明付ける。実存体としての *langue* という問題について、同書では“Les entités de la langue (ラングの具体的な実体)” という章立てさえ見られる一方で、同書の第二部第二章における注釈では、

“(前略) puisque la langue n'est pas une entité, et n'existe que dans les sujets parlants. Il ne faudrait pourtant pas aller trop loin, et il suffit de s'entendre.”
(CLG, 1916 : 19)⁽⁹⁾

“(前略) 言語は実在体ではなく、話手を離れて存在するものではないからである。然しながら極端に走るは不可であり、要はお互に分かりさへすればよいのである。”
(小林英夫訳, 1940 : 13)⁽¹⁰⁾

とその説明自体を否定し、内容的に矛盾している。そしてこのことが CLG における記述の不整合という第一の問題となる部分であり、後に時枝誠記による Saussure 学説への抵抗の際の論点の一つとなる部分である。

2. 時枝誠記による抵抗

CLG における、“言語が実存体 (*entité concrète*) としての一つの単位 (*unité*) である” という主張に対して異を唱えたのが国語学者、時枝誠記 (1900—1967) である。時枝は、次のように反意を露にする。

“彼自身が認めている様に、「言語」は心的なものに違いないが、それは単一単位とはいふことが出来ない。且つ一方が他方に呼応し、或は一方が他方を喚起する (原論初版一三五頁の訳語) ということであるならば、それは結合されたものではなくして、継起的な心的現象と考えなくてはならない。聴覚映像と概念とが、脳髄の中枢に於いて連合するという事実は、心理学的にも生理学的にも証明されることであるが、それが連合という主体的な精神生理的現象である限り、これを構成的客体に置直して考えることは許されないのである。かようにして、言循環に於いて求めた「言語」は、単一単位でないのみならず、二面の結合とも考え得られないものであって、飽くまで精神生理的複合単位であり、厳密にいえば、聴覚映像→概念、概念→聴覚映像として連合する継起的な精神生理的過程現象に他ならないのである。継起的過程を、並列的構造の単位として認めるということは、常識的便宜的説明としては許されるとしても、それによって若し学問の体系に矛盾を来たす

様な場合には、断じて許すことが出来ないのである。”

(時枝誠記, 1941 : 65)⁽¹¹⁾

こうした Saussure 学説への批判を基に、時枝が自著『国語学原論』と『国語学原論続篇』で展開したのが己の主張する言語理論である「言語過程説」である。「言語過程説」について時枝は、

“言語を表現過程の一形式であるとする言語本質観の理論を、ここに言語過程説と名付けるならば、言語過程説は、言語を以て音声と意味との結合であるとする構成主義的言語観或は言語を主体を離れた客体的存在とする言語実体観に対立するものであって、言語は思想内容を音声或は文字を媒介として表現しようとする主体的な活動それ自体であるとするものである。”

(時枝誠記, 1940 : 7, 1941 : 7)⁽¹²⁾

“言語過程説は、言語において、人間を取り戻そうとするのである。言語は、その本質において、人間の行為の一形式であり、人間活動の一であるとする時、何よりも肝要なことは、言語を、人間的現実の中において、人間的現実との関連において、これを観察するということである。(中略)

言語過程説は、言語を、音韻と概念(或は思想)との結語体と考える言語構成説に対し、言語を、精神、生理、物理的過程現象であるとする言語理論であって、(中略)言語は、何よりも人間生活全体の中で切取られる必要があるのである。”

(時枝誠記, 1956 : 6-14)⁽¹³⁾

“言語過程説が、言語を、〈人間の表現・理解の行為である〉と規定する時、先づ対決を迫られたのは、過程説とは全く異なった仮説理論である言語実体観であります。それは、近代言語学の根本理論で、言語を、〈音韻と意味との結合体である〉とする考へ方であります。”

(時枝誠記, 1965 : 49)⁽¹⁴⁾

と異を唱える。時枝はその過程を、主体が素材を伝達可能な形式に変換する機能、すなわち概念作用と称するのみであり、概念過程において一つの音声一般的な概念と個別概念とを別々に表わすことがあるとして音声と概念との結び付きを否定した。そして言語が実存体として人間の外に存在するのではなく、場を通しての言語活動における精神部分にあるとし、自らの学説が Saussure の学説に範を取る従来の構成主義的な言語研究の在り方に抗するものであることを公言してはばからない。

ではなぜ時枝は、Saussure 学説に対してこうまで批判的態度を露にしていたのであろうか。時枝はその理由と自らの学問的出発点に対して、次のように明言する。

“対象の観察とその分析は、その対象に規定されるということは、本論の最初に私が述べたことである。(中略)私は、この、対象が方法を規定するという仮説的理論に立って、言語研究の方法は、先ず対象である言語自体を観察することから始められねばならないと考えるのである。言語学の体系は、実に言語そのものの発見過程の理論的構成に他ならないのである。(中略)ソシュールが、言語の分析に用いた方法を、その対象との相関関係に於いて見る時、はたして右の如き方法が守られているであろうか。ソシュールの言語理論に対する疑は先ず最初にこの点に存するのである。”

(時枝誠記, 1941 : 60-61)⁽¹⁵⁾

“従来の構成主義的言語学の問題が、専ら言語の構成要素に置かれているのに反して、言語過程説に於いては、言語の過程的構造を中心として問題が展開するのである。それは言語の本質を心的過程と見る必然の帰結といわなければならない。過程的構造こそ言語研究の最も重要な問題が存するのである。”

(時枝誠記, 1941 : 92)⁽¹⁶⁾

“ヨーロッパの言語学は、それが自然科学の影響下に発達したところから、言語を自然物と同視するということは、宿命的にも考えられるのでありまして、言語は音声と意味との結合体として、言語を話す話手との関係について見ますと、言語は話手の外に存在し、社会の共有財産として、話手の使用する一つの道具或は資材として考えられて来ました。”

(時枝誠記, 1944 : 12)⁽¹⁷⁾

“私の学問の出発点は、批評といふことから始められたと云ってもよい位である。私の批評の一つの対象は、ヨーロッパの近代言語学の学説であり、他の一つは、日本の旧来の国語研究の理論である。わけても、日本

の旧来の研究に対しては、明治以後の批評を不当なものとし、これを正當に評価するには、どうしたならばよいかを考へた。” (時枝誠記, 1957: 135)⁽¹⁸⁾

時枝の真意は、Saussure の学説を批判しながら Saussure の学説を自説の言語過程説の下敷きにしつつ、自説の体系化を図ると同時に、Saussure に範を取る当時の日本の国語学界へ警鐘を鳴らすことであつた。このことは、松中 (2014, 2015, 2016)⁽¹⁹⁾において明らかにしたとおりである。なによりそれは、以下の時枝の言葉からも明らかである。

“日本の優れた言語学者であり、我が畏敬する友である小林英夫氏より、常に泰西の言語学の理論とその業績について幾多の啓発と教示とを親しく受け得ることは感謝に余りあることである。しかしながら、私は必しも (ママ) 小林氏によって示される理論の実演者ではなかつた。寧ろ私は、私の実証的探求の結論を泰西の理論に照し (ママ)、我自らの非を悟ることがあると同時に、時にはおほげなくも言語学の理論に対して批判の眼を向けざるを得ないこともあつた。(中略) 以下述べることは、私の国語に就いての実証的研究より得た言語の理論を、先づソシュールの言語理論に照し、私のテーゼに対するアンチテーゼとしてのソシュールの言語理論を述べることによって私の考を組織して見たのである。” (時枝誠記, 1937: 7-8)⁽²⁰⁾

その一環として時枝は自説における詞と辞を江戸時代の国語学者たちの考へに立ち返り、その有効性を説こうとした。それは高木敬生の、

“時枝は明治以降の西欧言語学の影響を受け言語を言語生活から切り離そうとする構成的言語観を批判し、旧来のつまり江戸期以前の国語学者たちによる言語生活に則した研究の可能性を再評価しようとしたのである。” (高木敬生, 2014: 60)⁽²¹⁾

という指摘に全て表れている。また、この点について北原美紗子は、

“時枝は、日本語の学問である国語学を、ヨーロッパの言語学の一部として扱われることに抵抗した。(中略) 日本の伝統的な学問がヨーロッパ言語学によって抹殺されていくことに、危機感を募らせた。(中略) 時枝の言語過程説は、日本の国学を近代の言語学に復活させたものとも考えられる。” (北原美紗子, 2002: 24)⁽²²⁾

と指摘する。くわえて藤井の、

“『(ソシュール) 言語学原論』を、時枝が批判したとき、それは結果からみると、日本社会での十九世紀的言語学に対する言語観の変更を要求しようとしたのであつて、事実上のあいては、たとえば山田孝雄らの『語構成観』であり、時枝が名をあげているのは神保格であり (『原論』, 三一ページ)、あるいはさきに引用した保科孝一のような、(中略) 概念とのあいだに連想 (association) すなわち観念連合の作用が働いて言語が成り立つから (中略) といった、いくたりかの考へであつて、それらを端的にいつて時枝は乗りこえようとした。” (藤井貞和, 2000: 104)⁽²³⁾

という言葉は、時枝による Saussure 学説批判の真意を端的に言い表している。時枝の Saussure 学説批判の真意は、藤井のこの言葉が全てであろう。しかるに時枝の Saussure 学説批判を引き起こした CLG における言語を実存体とする考へ方は、そうした時枝の批判にかかわらず、CLG における最大の不具合の一つであることは間違いない。

3. Saussure の自筆草稿

CLG では言語を支える中枢に langue を設定し、その存在が実存体であるとした。そして時枝による Saussure 学説批判は、CLG における langue が実存体であり主体の外に置かれるという記述を対象になされた。時枝に言語過程説の支柱が主体的価値意識であると言わしめたものが、CLG におけるこうした記述である。しかし 1996 年に発見された Saussure の自筆草稿では、言語の実存体という箇所は以下のように、時枝が問題にしていた内容とは正反対なのである。

“Dans des domaines comme celui de la langue, on ne peut pas dire que les différents êtres s’offrent du coup aux regards : il faut choisir un mot. Entité est pour nous aussi : l’être qui se présente.”

(Eisuke, Komatsu. 1993 : 290) ⁽²⁴⁾

“言語ラングのような学問の領域では、様々な存在エートルが、それ自体として姿を現すとは言えません。正確に言い換えなくてはなりません。実体アンティテとは、私たちにとって、結局、現れ出て来る存在エートルなのです。” [ゴシックと太字とルビ, 原文ママ] (相原奈津江・秋津伶訳, 2003 : 159) ⁽²⁵⁾

“Dans la langue prise face à face, sans intermediaries, il n’y a ni unités ni entités données. Il faut un effort pour saisir ce qui forme les diverses entités continues dans la langue ou pour éviter de prendre comme entités linguistiques ce qui sont des entités d’une autre ordre.”

(Eisuke, Komatsu. 1993 : 290) ⁽²⁶⁾

“媒介なしに直面する言語ラングの中には、単位ユニテも所与の**実体**アンティテもありません。言語ラングの中に含まれる様々な**実体**アンティテを形成するものを捉えるために、また、他の秩序の**実体**を言語なるもの**実体**として見なすのを避けるためにも、努力が必要です。” [ゴシックと太字とルビ, 原文ママ] (相原奈津江・秋津伶訳, 2003 : 159-160) ⁽²⁷⁾

“(la langue n’existe pas comme entité, mais seulement les sujets parlants!)”

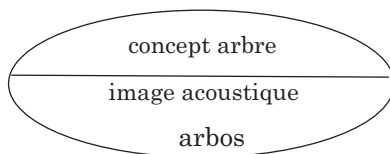
(Eisuke, Komatsu. 1997 : 93) ⁽²⁸⁾

“言語ラングは**実体**アンティテとして存在しているのではなくて、話す主体の裡にだけ存在しているのです！” [ルビ原文ママ] (相原奈津江・秋津伶訳, 2006 : 168) ⁽²⁹⁾

“Comme nous l’avons reconnu, le signe linguistique repose sur une association faite par l’esprit entre deux choses très différentes, mais qui sont toutes deux psychiques et dans le sujet : une image acoustique est associée à un concept. L’image acoustique 〈n’est pas le son matériel〉, c’est l’empreinte psychique du son. (中略)

Il y a bien un objet qui est en dehors du sujet, et le nom, don’t on ne sait pas bien s’il est vocal ou mental: (中略) Le lien entre les deux n’a rien de clair.

Dans la conception rationnelle nous retrouvons deux termes, mais ces deux seront cette fois :



et ils seront tous deux dans le sujet et tous deux psychiques, concen très au même lieu psychique par l’association.” (Eisuke, Komatsu. 1997 : 285-286) ⁽³⁰⁾

“ご承知の通り、言語ラング記号は、非常に異なる二つのものの中にあり、とはいえ二つとも心理的なものであって、主体の中、つまり、聴覚イメージが一つの概念コンセプトに結合している主体の中で精神的なものによる結び付きの上に成立しています。聴覚イメージとは、〈物質的な音ではなく〉、心理的な音の刻印なのです。(中略)

対象物は主体の外にあります。一方、名称は、声音的なものなのか、精神的なものなのか分かりませんが、(中略) 両者の結び付きが、明確ではありません。

純粋に理論的な構想の中で、私たちは二つの用語テルムを見出しますが、その二つの用語テルムとは、以下の通りです。



そして、これらは両者とも主体の中にあり、また両者とも心理的なものであって、結合により同じ心理的な場所に収められています。” (相原奈津江・秋津伶訳, 2003 : 151-152) ⁽³¹⁾

“Ainsi le *lieu* du mot, la spherè où il acquiert une réalité, est purement l'ESPRIT, qui est aussi le seul *lieu* où il ait son sens :” [斜体部原文ママ] (Bouquet, S. & Engler, R., 2002 : 83)⁽³²⁾

“こんなわけで語の場所は、語が〈実在を獲得する〉領域は、純然とした精神であり、それはまた語が意味〈をもつような〉唯一の場所なのである。” [ゴシックと太字と傍点、原文ママ]

(松澤和宏校註・訳、2013 : 136)⁽³³⁾

“Tout ce qui est amené sur les lèvres par les besoins du discours et par une operation particulière: c'est la *parole*.

Tout ce qui est contenu dans le cerveau de l'individu, le dé pôt des fo|rms entendues et pratiquées et de leur sens, c'est la *langue*.(中略)

De ces deux sphères, la sphere parole est la plus sociale, l'autre est la pluscomplètement individuelle. La langue est la reservoir individual ; toutce qui entre dans la langue, c'est-à-dire dans la tête, est individuel.”[斜体部原文ママ] (Eisuke, Komatsu. 1993 : 92)⁽³⁴⁾

^{ディスクール}言述の必要に迫られ、特殊な働きで唇にもたらされたものの全体、それが^{パロール}言葉です。^{アンティグイジュ}個 人の脳の中に含まれている一切のものであり、〈聞き取られ〉実践された形態、及びそれらの意味の収蔵庫、〈それが^{ラング}言語なのです。(中略)

この二つの領域のうち、^{パロール}言葉の領域とは優れて社会的なものであり、もう一つのもの[訳注：言語]はまったく完全に個人的なものです。^{ラング}言語とは個人的な貯蔵庫です。^{ラング}言語の中に、つまり頭の中に入っているすべてのものは、個人的なもの(中略)なのです。” [ルビと下線、原文ママ]

(相原奈津江・秋津伶訳、2008 : 150-151)⁽³⁵⁾

“Une succession de sons vocaux, par exemple *mer* ($m + e + r$), est peut-être une entitéentrant dans le domaine de l'acoustique, ou de la physiologie ; elle n'est à aucun titre, dans cet état, une entité linguistique.

Une langue existe si à $m + e + r$ s'attache une idée.”[斜体部原文ママ] (Bouquet et Engler, 2002 : 20)⁽³⁶⁾

“ある〈音声の〉音の継起、たとえば *mer* ($m + e + r$) は聴覚的なものの領域かあるいは生理学の領域〈に帰属する〉^{アンティグイジュ}本体である〈かもしれない〉。それは、〈この状態では、いかなる資格であれ、〉^{アンティグイジュ}言語学的本体にはなりえない。

ある一つの^{ラング}言語が存在するのは、 $m+e+r$ に観念が結びついている場合である。” [ルビ原文ママ]

(松澤和宏訳、2013 : 9)⁽³⁷⁾

“Le dualism profond qui partage le langage ne reside pas dans le dualism du son et de l' idée, du phénomène vocal et du phénomène mental ; c'est làla façon facile et pernicieuse de la concevoir. Ce dualism reside dans la dualisté du phénomène vocal COMME TEL, et du phénomène vocal COMME SIGNE – dufait physique (objectif) et du fait physic-mental (subjectif), nullement du fait◀physique▶ du son par opposition au fait◀mental▶ de la signification. Il y a un premier domaine, intérieur, psychique, où existe le signe autant que la signification, l'un indissolublement lié à l'autre ; il y en a un second, extérieur, où n'existe plus que le◀signe▶,mais à cet instant le signe réduit à une succession d'ondes sonores ne mérite pour nous que le nom de figure vocale.” (Bouquet et Engler, 2002 : 20-21)⁽³⁸⁾

“言語を分割する根本的な二元論は、音と観念、つまり音声現象と精神現象の二元論にはない。それは〈二元論を〉考えるうえでは安易で有害な考え方である。この二元論は、**かかるものとしての音声現象と記号としての音声現象の二重性**にあり、物理的〈(客観的な)〉事実と物理的—〈精神的(主観的)〉事実の二重性にある。〈意義の「精神的」事実に対立する音の「物理的」事実なのでは〈まったくない〉。第一の領域があるが、これは〈内面的で〉心的であり、そこでは記号が意義と同様に存在していて、一方は他方に分かち難く結びついている。二番目の領域であるが、それは外面的で、そこではもはや「記号」しか存在しない。だがしかし記号はこの場合一連の〈音波に還元されてしまっているの〉われわれにとっては、たかだか音声形象〈の名称にしか値しない。〉” [ゴシックと太字、原文ママ] (松澤和宏訳、2013 : 11-12)⁽³⁹⁾

“La troisième est de comprendre que le mot pas plus que son sens n'existe hors de las conscience que nous

en avons, ou que nous voulons bien en prendre à chaque moment. Nous sommes très éloigné de vouloir faire ici de la métaphysique.” (Bouquet et Engler, 2002 : 83)⁽⁴⁰⁾

“第三の仕方は、語はその意味と同様に、われわれがそれについても意識の外側には存在しない、あるいは各時点でわれわれがそれについて抱く意識の外側には存在しないというものである。”

(松澤和宏訳, 2013 : 135)⁽⁴¹⁾

自筆草稿において、Saussure は言語が実存体であるとは一言も言っていないばかりか、それはわれわれの精神の内に存在すると述べており、Bally と Sechehaye の手による CLG の主張とは多くの点で正反対なのである。

4. むすび—Saussure 学説と時枝学説の接点—

CLG では言語を実存体として扱う。そしてこれこそが、時枝が Saussure 学説に対して異を露にした主要な問題点の一つであり、Saussure 学説の最大の擁護者であった服部四郎⁽⁴²⁾でさえも、その解釈に間違いを犯したフランス語の *entité* という術語解釈に由来する問題でもある。すなわち英語の *entity* と同様の意味で言語を *entité* と捉えれば、言語がまるで鉛筆や消しゴムなどのように個物の形状を伴った三次元的な存在として存在するかのような意味に取られてしまう危険性が大きい。

この点については、大橋保夫の以下の主張が解答を与えてくれる。

“ソシュールはホイットニーや青年文法学派以前の、言語をそれ自体のうちに定まった生長の機制をもつ動植物のように見る言語観は斥けるが、言語を有機的体系として存在するものと見るので、新学派のように言語が *entité* であることを否定するのは行きすぎと考える。つまり「言語は *entité* である」は青年文法学派までの考え方であり、しかもソシュールはそれを肯定しているのである。(自分自身の用語法としては、さらに一段つっこんで、言語記号を *entité* としているけれども)。したがって、序説の脚注と以下の本文の間にはなんの矛盾もなく、服部氏(および時枝)のような苦しい説明はなんら必要でない。(中略)服部四郎氏は、*entité* という語の意味も誤解している。その理由の一つは、(中略)英語の *entity* の意味を援用してフランス語の *entité* を解釈したことであろう。(中略)英語ではいま説明したフランス語の使い方のほかにかなり漠然と「もの」を指すのに *entity* を使うが、フランス語の *entité* はそうではない。(中略)すなわち、この語は言語にとって本質的なものを指し、原則的には *entité linguistique* もしくは *entité de la langue* という形で使われる。*Cours* の中では、ソシュールの用語として言語に関して使われるかぎり、修飾語がついていなくても同じ意味である。そして *entité linguistique* と呼ばれるのはまず言語記号であり、かつそれは、能記と所記が結合した形でとらえなければ本質性を失い、*entité* とは呼ばれない。だから音素や音節は「単位」*unité* ではあっても、*entité* ではないのである。記号体系としての言語にとって本質的な文法的諸手段も当然 *entité* であるが、記号が *entité concrète* であるのに対して *entité abstraite* と呼ばれる。「実存体」という訳語だけではこの本質的要素という意味が十分につかめないが、このことを理解すると『講義』の中のなぞめいた文はだいぶわかりやすくなる。” (大橋保夫, 1973 : 10-13)⁽⁴³⁾

同様に、Bouissac の次の説明も「言語実存体」の本質をうまく捉えている。

“Saussure repeatedly asserted that *langue* is “concrete”, meaning by this that it is not an abstract ideal reality, and that its template resides in individual brains. At any given time, when speakers of a language use this language to express their thoughts and to communicate with each other, they draw upon the resources provided by their *langue*, that is, they select some of the relations, or values, that allow them to produce significations for themselves and for their interlocutors who share the same *langue*.” [斜体部原文ママ]

(Bouissac, 2010 : 81)⁽⁴⁴⁾

“ソシュールは「ラングは具体的な存在だ」と何度も断言している。その意味は、ラングとは抽象的・概念的な存在ではなく一人一人の人間の脳に宿るもの、ということだ。ある言語の話者が自分の考えを人に伝えたり、誰かとコミュニケーションを取ったりするために言語を使うとき、彼らは自分の使うラングからリソース(資源)を引き出している。つまり、関係や価値を選び出し、それによって自分や同じラングを共有する

対話の相手に対して意味を生産することができる。”

(鷲尾 翠訳, 2012 : 143)⁽⁴⁵⁾

Saussure 学説に強く抵抗した時枝であるが, Saussure が CLG において己の言語理論を「語る主体」から出発するのと同じように, 時枝も言語の本質を捉えるのに「主体的立場」から出発する。時枝の「言語過程観」の中で繰り返し強調されるのが、「主体」や「主体的立場」という用語とその観念である。時枝の「主体的立場」では, Saussure とは反対に, 主体の意識なしには言語は存在しないとして, 言語過程の成立において主体が中心に置かれる。

結果, 「主体」とはまさに Saussure が言うところの「語る処の主体」であり話者を指す。時枝は, 言語の存在条件として「主体」, 「場面 (聴き手)」, 「素材 (社会)」の三要素を挙げる (『国語学原論上』 p. 57)。「場面」は空間的な意味での場所とそれを満たす内容およびそれらを志向する主体の主観的意識をも含むものである。聴手とはあくまでも場面の一部としての聴手であり, 時枝が言語において社会概念としてみるものが主体の表現行為に対する場面の影響であると言える。素材とは言語の表わす「表象, 概念, 事物」であって, 時枝によれば「構成主義的言語観」における「意義或は意味の名に於いて, 音声形式に対応するもの」である。これらの要素はそれぞれ言語の外にあるものとされる。時枝はその過程を, 主体が素材を伝達可能な形式に変換する機能, すなわち概念作用と称するのみであり, 概念過程において一つの音声が一般的概念と個別概念とを別々に表わすことがあるとして音声と概念との結びつきを否定する。しかしながら1996年に発見された自筆草稿に見る Saussure の言葉は, 時枝が言語過程説で主張した内容となら差異が見られないのである。

時枝と Saussure の言語研究に対する見方は, 言い換えれば, 言語を静的なものとして捉えるか動的なものとして捉えるかという視点の違いに帰依する。釘貫亨は, 言語の静的側面と動的側面に対して, 次のように述べる。

“時枝は, ソシユールの理論を「構成主義的」であると批判し, 言語を思考の表現過程および理解過程とする行動主義的言語観を主張する。言語を静的「存在」と捉えるか, 動的「行為」として捉えるかの論争は, 哲学者や言語学者を悩ませてきた永遠の難題でもあるが, 日本ではこの議論がソシユール学説を論議する過程で行われた。(中略)時枝によれば, 「概念と聴覚映像が結合したラング」(注: これはラングではなく記号 *signe* の誤り, このような初歩的な間違いによって時枝は孤立した)は, 構成主義的言語観によるものであり, 記号を実体として認識しようとする限り, 構成要素は個別科学的分析の中に分散, 解消されてしまうだろう。時枝は, 言語を概念と聴覚映像の同時並列的結合と捉えるのではなく, 言語全体を表現過程, 理解過程として捉えることによって概念や音声を統一的に把握することが出来るとした。”

(釘貫 亨, 2007 : 123-124)⁽⁴⁶⁾

Saussure は, 動的な言語を科学的研究対象とするための静的な基準をどこに求めるべきかという一つの答えに *langue* を設定した。しかし時枝は, 言語学において *langue* という仮説の上に立つことで成立する概念を否定し, 具体的経験から導かれた言語過程説という自説の有効性を声高に主張した。事実, 言語とは *une entité psychique* (小林英夫訳「心的実存体」)ではなく, 話者と聴者の間に成り立つ「行為」とその「過程」によって決定され得るものであるとする時枝学説の出発点が, 原資料によって示された Saussure の言語研究の出発点と酷似していることは, 疑いようのない事実である。そして1996年に発見された Saussure の自筆草稿では Saussure 自身, *langue* の所在について具体的実存体などという言葉はどこにも使っていない。Saussure にとって言語学の主たる対象は物理的な音声形象ではなく, 語の意味とその存在なのである。それは「〈内面的で〉心的であり, そこでは記号が意義と同様に存在していて, 一方は他方に分かち難く結びついている」のであり, その理由は「語はその意味と同様に, われわれがそれについてもつ意識の外側には存在しない」からである。

北原美紗子は,

“時枝誠記の『国語学原論』と, ソシユールの『言語学原論』とを, 読み終って思うのは, ソシユールと時枝との二冊の本の, 驚くほどの類似性である。(中略)ソシユールと時枝, 二人の天才的な言語学者の論を, 慎重に読み進めていくと, 前にも述べたが, 論の立ち方, 議論の展開が非常に似ているのに気付く。”

(北原美紗子, 2003 : 22, 24)⁽⁴⁷⁾

と述べるが, 松中 (2014, 2015, 2016)⁽⁴⁸⁾で示したように, 北原以外にも柴田健志⁽⁴⁹⁾, 藤井貞和⁽⁵⁰⁾, 高木敬生⁽⁵¹⁾, 町田健⁽⁵²⁾, 松澤和宏⁽⁵³⁾などに代表されるように, 時枝と Saussure の学説がその根底において似通っていることを指摘する声は多い。藤井貞和はこうした両者の学問的類似について,

“ソシュールの言語観は、時枝の《言語過程説》のそれにきわめて近接し、言語を記号（シーニュ）一般へ解消することへの懸念がつよくうかがえるのは（中略）言語という、いわば“ない”存在にふれていった両者の相似を十分にうかがわせる性格が見られる。”（藤井貞和，2000：103）⁽⁵⁴⁾

と指摘するが、まさに真実である。

Saussureの自筆草稿が時枝の存命中に発見されていたなら、時枝の言語過程説はおろか、その後起こる時枝によるSaussure学説批判とそれに対する服部四郎らによる反論、およびそこでの一連の議論を基に飛び火、拡大していったいわゆる「時枝・服部論争」でさえ、生じなかったであろう。「時枝・服部論争」の経緯と性質については松中（2001, 2005, 2007, 2008, 2017）⁽⁵⁵⁾で詳しく論じているので、そちらを参照されたい。

ここまで見て、CLGの内容的不整合やそれを基に繰り広げられてきた時枝によるSaussure学説の批判が、CLG編者のBallyとSechehayeによる功罪であることが今や明らかである。われわれは言語研究の姿勢において過去から現在に至るまで微塵も揺らぐことのない先人の態度に、言語実存観の克服をめぐる苦悩と苦闘がSaussureにしても時枝にしても共通の姿勢であり、そこに今日的な人間主体の言語研究の原点があることを見出すことができる。

文 献

- (1) 本稿は、2017年度久留米工業大学学長裁量費による教育研究費（研究課題名：「ソシュール学説の意味論的再検討とそれに基づく意味研究」）の助成を受けた研究成果の一部である。
- (2) 松中完二，“ソシュールと時枝誠記の主体的言語観について” 国際基督教大学アジア文化研究所公開シンポジウム「アジア研究の現在—思想・歴史・言語」(2014)，於：国際基督教大学。／松中完二，“Saussureと時枝誠記の主体的言語観についての再検討—*Cours de linguistique générale*と『国語学原論』を基に—” 国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』別冊第20号(2015)，pp. 159-175，国際基督教大学。／松中完二，“ソシュール学説の一つの矛盾についての考察—言語記号の差異について—” 久留米工業大学編『2015久留米工業大学研究報告』第38号(2016)，pp. 54-66，久留米工業大学。／松中完二，“ソシュール学説の一つの有効性についての考察—「記号の恣意性」について—” 久留米工業大学編『2016久留米工業大学研究報告』第39号(2017)，pp. 72-84，久留米工業大学。
- (3) Saussure, F. de., “*Cours de Linguistique Générale*” (1916), Paris: Payot.
- (4) 小林英夫訳，“言語学原論”(1928)，岡書院。
- (5) 小林英夫訳，“改訳新版言語学原論”(1940)，岩波書店。
- (6) Saussure, F. de., “*Cours de Linguistique Générale*.” (1916), Paris: Payot.
- (7) 小林英夫訳，“言語学原論”(1928)，岡書院。
- (8) 小林英夫訳，“改訳新版言語学原論”(1940)，岩波書店。
- (9) Saussure, F. de., “*Cours de Linguistique Générale*” (1916), Paris: Payot.
- (10) 小林英夫訳，“改訳新版言語学原論”(1940)，岩波書店。
- (11) 時枝誠記，“国語学原論”(1941)，岩波書店。
- (12) 時枝誠記，“国語学史”(1940)，岩波書店。ならびに時枝誠記，“国語学原論”(1941)，岩波書店。
- (13) 時枝誠記，“国語学原論統篇”(1956)，岩波書店。
- (14) 時枝誠記，“言語過程説の成立とその展開”『国語学(60)』(1965)，国語学会。
- (15) 時枝誠記，“国語学原論”(1941)，岩波書店。
- (16) 時枝誠記，“国語学原論”(1941)，岩波書店。
- (17) 同上。
- (18) 時枝誠記，“国語学への道”(1957)，三省堂。
- (19) 松中完二，“ソシュールと時枝誠記の主体的言語観について” 国際基督教大学アジア文化研究所公開シンポジウム「アジア研究の現在—思想・歴史・言語」(2014)，於：国際基督教大学。／松中完二，“Saussureと時枝誠記の主体的言語観についての再検討—*Cours de linguistique générale*と『国語学原論』を基に—” 国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』別冊第20号(2015)，pp. 159-175，国際基督教大学。／松中完二，“Saussureと時枝誠記—Saussure学説の受容と抵抗—” 日本フランス語フランス文学会2016年度秋季全国大会ワークショップ「ソシュール『一般言語学講義』の1世紀—構造主義，時枝論争，新手稿」(2016)，於：東北大学。
- (20) 時枝誠記，“心的過程としての言語本質観(一)”『文学』五卷五号(1937)，pp. 1-30，岩波書店。
- (21) 高木敬生，“言語の社会性について—ソシュールと時枝から—”『エウローペー』No. 21(2014)，pp. 55-73，成城大学大学院文学研究科。
- (22) 北原美紗子，“時枝誠記の『国語学言論』を読む—ソシュールの『言語学言論』を併せ読みつつ—”『清泉女子大学紀要51』(2003)，pp. 17-34，清泉女子大学。
- (23) 藤井貞和，“国文学の誕生”(2000)，三元社。

- (24) Eisuke Komatsu, “*F. de Saussure Cours de Linguistique Generale. Premier et troisième cours d’après les notes de Riedlinger et Constantin*” (1993), Collection Recherches Université Gakushuin n° 24. Tokyo: Gakushuin University.
- (25) 相原奈津江・秋津伶訳, “フェルディナン・ド・ソシユール一般言語学第三回講義 (1910-1911) エミール・コンスタンタンによる講義記録” (2003), エディット・パルク.
- (26) Eisuke Komatsu, “*F. de Saussure Cours de Linguistique Generale. Premier et troisième cours d’après les notes de Riedlinger et Constantin*” (1993), Collection Recherches Université Gakushuin n° 24. Tokyo: Gakushuin University.
- (27) 相原奈津江・秋津伶訳, “フェルディナン・ド・ソシユール一般言語学第三回講義 (1910-1911) エミール・コンスタンタンによる講義記録” (2003), エディット・パルク.
- (28) Eisuke Komatsu, “*F. de Saussure Deuxieme Cours de Linguistique Générale. (1908-1909) d’après les cahiers d’Albert Riedlinger et Charles Patois*” (1997), Paris: Pergamon Press.
- (29) 相原奈津江・秋津 伶訳, “フェルディナン・ド・ソシユール一般言語学第二回講義 (1908-1909)” (2006) エディット・パルク.
- (30) Eisuke Komatsu, “*F. de Saussure Deuxieme Cours de Linguistique Générale. (1908-1909) d’après les cahiers d’Albert Riedlinger et Charles Patois*” (1997), Paris: Pergamon Press.
- (31) 相原奈津江・秋津 伶訳, “フェルディナン・ド・ソシユール一般言語学第三回講義 (1910-1911) エミール・コンスタンタンによる講義記録” (2003), エディット・パルク.
- (32) Bouquet, S. & Engler, R., “*Ferdinand de Saussure, Écrits de linguistique générale*” (2002), Paris: Gallimard.
- (33) 松澤和宏校註・訳, “フェルディナン・ド・ソシユール「一般言語学」著作集 I 自筆草稿『言語の科学』” (2013), 岩波書店.
- (34) Eisuke Komatsu, “*F. de Saussure Cours de Linguistique Generale. Premier et troisième cours d’après les notes de Riedlinger et Constantin*” (1993), Collection Recherches Université Gakushuin n° 24. Tokyo: Gakushuin University.
- (35) 相原奈津江・秋津 伶訳, “フェルディナン・ド・ソシユール一般言語学第一回講義リードランジェによる講義記録” (2008), エディット・パルク.
- (36) Bouquet, S. & Engler, R., “*Ferdinand de Saussure, Écrits de linguistique générale*” (2002), Paris: Gallimard.
- (37) 松澤和宏校註・訳, “フェルディナン・ド・ソシユール「一般言語学」著作集 I 自筆草稿『言語の科学』” (2013), 岩波書店.
- (38) Bouquet, S. & Engler, R., “*Ferdinand de Saussure, Écrits de linguistique générale*” (2002), Paris: Gallimard.
- (39) 松澤和宏校註・訳, “フェルディナン・ド・ソシユール「一般言語学」著作集 I 自筆草稿『言語の科学』” (2013), 岩波書店.
- (40) Bouquet, S. & Engler, R., “*Ferdinand de Saussure, Écrits de linguistique générale*” (2002), Paris: Gallimard.
- (41) 松澤和宏校註・訳, “フェルディナン・ド・ソシユール「一般言語学」著作集 I 自筆草稿『言語の科学』” (2013), 岩波書店.
- (42) 服部四郎, “言語過程説について” 京都大学国文学会編『国語国文』第26巻, 第1号 (1957a), pp. 1-18, 中央図書出版.
／服部四郎, “ソシユールの langue と言語過程説” 日本言語学会編『言語研究』第32号 (1957b), pp. 1-42, 三省堂.
- (43) 大橋保夫, “ソシユールと日本服部・時枝言語過程説論争の再検討 (上) — 「言語は実存体ではない」をめぐる — 『みすず』第15巻, 第8号 (1973), pp. 2-15, みすず書房.
- (44) Bouissact, P., “*Saussure: A Guide for the Perplexed*” (2010), New York: Continuum International Publishing Group.
- (45) 鷲尾 翠訳, “ソシユール超入門” (2012), 講談社.
- (46) 釘貫 亨, “ソシユール『一般言語学講義』と日本語学” 松澤和宏編『SAUSSURE et LA SCIENCE DES TEXTES ソシユールとテキストの科学』(2007), pp. 119-136, 名古屋大学大学院文学研究科.
- (47) 北原美紗子, “時枝誠記の『国語学言論』を読む—ソシユールの『言語学言論』を併せ読みつづ—” 『清泉女子大学紀要51』(2003), pp. 17-34, 清泉女子大学.
- (48) 松中完二, “ソシユールと時枝誠記の主体的言語観について” 国際基督教大学アジア文化研究所公開シンポジウム「アジア研究の現在—思想・歴史・言語」(2014), 於: 国際基督教大学. / 松中完二, “Saussure と時枝誠記の主体的言語観についての再検討—*Cours de linguistique générale* と『国語学原論』を基に—” 国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』別冊第20号 (2015), pp. 159-175, 国際基督教大学. / 松中完二, “Saussure と時枝誠記—Saussure 学説の受容と抵抗—” 日本フランス語フランス文学会2016年度秋季全国大会ワークショップ「ソシユール『一般言語学講義』の1世紀—構造主義, 時枝論争, 新手稿」(2016), 於: 東北大学.
- (49) 柴田健志, “言語と主体: 時枝誠記のソシユール批判再考” 『京都大学大学院文学研究科哲学研究室紀要: Prospectus』(1999), pp. 27-42, 京都大学.
- (50) 藤井貞和, “国文学の誕生” (2000), 三元社.
- (51) 高木敬生, “言語の社会性について—ソシユールと時枝から—” 『エウローパー』No. 21 (2014), pp. 55-73, 成城大学大学院文学研究科.
- (52) 町田 健, “日本語のしくみがわかる本” (2000), 研究社出版.
- (53) 松澤和宏, “時枝誠記の〈主体的立場〉とソシユールの〈話者の意識〉—言語の科学と解釈学” 釘貫 亨・宮地朝子編『ことばに向かう日本の学知』(2011), pp. 97-119, ひつじ書房.
- (54) 藤井貞和, “国文学の誕生” (2000), 三元社.

- 65) 松中完二, “認知的言語研究の先駆者としての時枝誠記” 国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』第27号(2001), pp. 197-211, 国際基督教大学. / 松中完二, “時枝・服部論争の再考察 (I) 一言語研究の原点的問題として—” 敬愛大学経済学会編『敬愛大学研究論集』第69号(2005), pp. 109-146, 敬愛大学. / 松中完二, “時枝・服部論争の再考察 (II) 一言語研究の原点的問題として—” 敬愛大学経済学会編『敬愛大学研究論集』第70号(2007), pp. 175-212, 敬愛大学. / 松中完二, “時枝・服部論争の再考察 (III) 一言語研究の原点的問題として—” 敬愛大学経済学会編『敬愛大学研究論集』第74号(2008), pp. 49-109, 敬愛大学. / 松中完二, “ソシユール言語学の意味論的再検討”(印刷中), ひつじ書房.